

中国高校英語教科書の文化の取り扱い

林 田 享 子

Culture Learning in *Senior English for China*

Kyoko Hayashida

Proper nouns (the names of persons, places, languages, customs and festivals) and topics in 5 books in the series *Senior English for China* were examined in order to delineate the culture, or cultures, to be learnt.

Since the series are the products of People's Education Press in cooperation with Longman in Britain, the English used in the textbooks is British. However, the results show that the cultural content is much more US-oriented, with emphasis mainly on native-English countries and on the fields of science and technology, which is in accord with the governmental policy of "Modernization". The textbooks also include the topics in global issues, but with few references to other areas or cultures. Comparison with China is an often-employed technique for productive skills. A possible misunderstanding concerning American English and other features are also discussed.

Key Words: culture, English, proper nouns, textbooks, topics

1 研究の目的

英語は民族語であり、また、世界的に共通語として最も頻繁に使用される言語である。英語学習の目的が、民族語としての英語使用、つまり、英語のネイティブ・スピーカーを相手とした英語使用であるならば、学習内容は、一般には特定の英語文化圏において適切と見なされる英語運用能力である。しかし、今日の英語学習においては、特定の英語文化圏だけを想定した学習内容では不十分である。英語圏には複数の国もしくは文化が存在する。また、最近では、英語のネイティブ・スピーカー以外を相手とした英語使用の機会がますます増えている。

本稿では、中国の高校英語教科書において、民族語と世界共通／補助語という英語の2つの特性が、実際、どのように処理されているかの確認を行った。著者は、これまでに、日本の高校教科書【英語Ⅰ・Ⅱ】6種類を対象として、この確認を行っている（林田 101-19）。

本稿は、その続編である。

具体的には、教科書に登場する固有名詞と話題を調査し、その結果から文化の取り扱いの特徴をとらえた。固有名詞の登場頻度は扱う話題に左右される。しかし、話題が意図的に選択されるのに対して、文法問題などの単文に登場する固有名詞はその意図性が弱い。英語学習が、理念上だけでなく、実際にどの文化圏あるいは国を念頭に置いて考えられているかは、この両者の取り扱いから、より明確になると考えたからである。

2 調 査 方 法

(1) 資料

国定教科書のシリーズで、すでに出版済みの次の5冊を使用した。

高級中学教科書¹ *Senior English for China*
 1 A/1 B (1996), 2 A (1996), 2 B (1997), 3 A (1998)
 人民教育社とイギリスのロングマン社との共編

中国は、1985年に9年間の義務教育制を公布し、翌年から主要都市を中心にその実施を開始した。以降、教科書は、地域差によって、国定教科書と国の審査に合格した教科書の中から選択できるようになった。調査に用いた人民教育社とロングマン社共編のシリーズは、1993年の英語カリキュラム改訂に伴って出版された国外機関との初の共編教科書である。同シリーズの初級中学用の教科書は、全体の約80%の学校が採用しているという (Adamson & Morris 23)。

教科書の年間学習量と全体の構成は、日本の場合と対照させると、次の通りである。

	中国	日本
	<i>Senior English for China</i>	『英語 I・II』
年間学習量	2分冊 (A, B)	1分冊 (I または II)
頁数*	A 4 版 140+132; 156+156; 144	B 5 版 132・132; 150・149; 152・152; 159・162 A 4 版 103・99; 109・49+51
課数	英語 1 A: 14 units; その他: 12 units + Additional exercises もしくは Close test, 1 unit = 4 lessons**	各冊 12~16 lessons + 1~4 readings

*巻末の付録・文法のまとめ・語彙表などは除く：

Senior English for China は順に, 1 A + 1 B; 2 A + 2 B; 3 A

『英語 I・II』は順に, B 5 版 *Powwow; New Horizon; Milestone; Unicorn*, A 4 版 *Go, English; Vista*

中国高校英語教科書の文化の取り扱い

**各 lesson の内容：

1 A/B (L1：対話, L2：リーディング, L3：文法などのまとめ, L4：リスニング・練習問題)

2 A/B, 3 A (L1：対話, L2 & L3：リーディング, L4：ライティング・リスニング・練習問題)

中国の場合、学習單元には unit という語を用いている。各 unit で学習する内容は、日本の各 lesson の内容と同様であるが、学習内容によって、さらに独立する4つの lesson に分かれている。また、練習問題とリーディングの占める割合が日本の場合より大きい。練習問題が各単元の1課を構成する一方、別枠でも、各課に対応する練習問題と総まとめの練習問題を設けている。また、リーディングの課は、2年次から4課中2課に増加している。

(2) 調査項目

固有名詞は、人名、地名、言語名、外国の風習・祭礼行事名を調査項目とした²。人名は、さらに、「偉人・有名人」と「その他の人名」に、そして、地名は「地域・国」と「国内の地名」に分けた。

話題は、「特定の1ヶ国」、「複数の国・地域」、「人物（伝記）」、「ストーリー」、「言語」、「その他」に分類した。「その他」は、舞台になっている国・地域がない話題で、前の5つの範疇に該当しない話題である。各単元は、通常、一貫して同じ話題を取り上げている。しかし、練習問題によっては、対話やリーディングの課とは別の話題のリーディング教材を用いている。これも調査の対象とした。

3 調査結果

(1) 固有名詞

[偉人・有名人] 地域別では、中国の5名とインドのガンジー以外は、全員が英語圏もしくはヨーロッパの出身者である(表1)。両地域の総数を比較すると、英語圏がヨーロッパの2倍以上である。

国別では、アメリカが各学年で最も多い。分冊別でも、1分冊でイギリスと同数であるが、その他ではイギリスを上回っている。英語圏では、両国の他に、アイルランドの1名が登場するに過ぎない。また、ヨーロッパでは、ドイツが5名、フランスが4名、オーストリア、イタリア、ロシア、スペインが各1名登場している。

ジャンル別では、英語圏の場合、スポーツ、ポップ・ミュージック、政治、ジャーナリズム、小説、科学など、多方面にわたっている。その中には、いわゆる現代の大衆文化の有名人が含まれる。一方、その他の地域の扱いは、これとは違った傾向を示している。アジ

表 1 偉人・有名人

1A		1B		2A		2B		3A	
登場箇所	人名	登場箇所	人名	登場箇所	人名	登場箇所	人名	登場箇所	人名
Chin	E7,E13 Zhou Enlai(周恩来)	E23 24	Chongzhen, Emperor(崇禎帝) NI Jia Sixie(賈思儼)	Mao Zedong(毛沢東)	E13	Mao Zedong	E2	Cao Cao(曹操)	
US	10 Lewis, Carl	20E	Bell	1 Disney, Walt	13	Beck, Alexander	E9	Rudolph, Wilma	
	11 Denver, John		Lincoln	2 Eisenhower, John	13,E18	Lincoln, Abraham	E11	King, Jr., M.L.	
	11 Jackson, Michael	A10	Snow, Edgar	5 Bergen, Cardice	19	Kennedy	12	Ford, Henry	
	13 Lincoln, Abraham			5 Lincolin, Abraham	18,19	King, M.L., Jr.			
	13 Grade, Tom			E5,10 Twain, Mark					
	E11 Presley, Elvis			(E10 Samuel Langhorne Clements)					
				C1 Lindbergh, Charles A.					
Eng	N13 Edison	20	George Stephenson	5,8 Chaplin, Charlie & Syd	20	Hawking, Stephen	2	Cook(Captain), James	
		20	Robert Stephenson	G10 Newton, Isaac, Sir	E20	Chopin	E3	Princess Diana	
				E12 Bruce, Robert	C23	Guinness			
Ir		26	Geldof, Bob		E16	Quinn, Bob	6	Gould, Bob	
Ger		21,E22	Marx, Karl(& Jenny)		13	Hitler	6	Merkham	
		21,A23	Engels	E12,C1 Einstein(US)	13	Merkham, Karl			
					13,E18	Einstein, Albert			
Fr		E25	Pasteur, Louis		20	Beethoven			
					E18	Joseph Montgolfier	1	Curie(Madame & Pierre)	
					E18	Charles			
Aus	11 Mozart								
It	8 Columbus, Christopher				14	Leonov(Astronaut)			
Rus									
Sp									
As				E5	Ghandhi(映画)			C3	Cortes, Hernando

E: 各単元の各課に付したExercises, C: 各単元に付したClose test, A: Additional exercises, N: 巻末の注
 数値は単元番号、ただしAとGの数値は問題番号
 網掛けは、既に学習済みの分冊に登場していた名前

アでは、中国の4名は国の興亡に係わった皇帝や政治家で、1名は農学者である。また、インド独立の指導者であるガンジーは、イギリス制作の映画のタイトル名で登場している。ヨーロッパの場合には、全13名中、ロシアの宇宙飛行士1名を含む6名が科学者である。また、2名は中国の政治思想の支柱と見なされる人物である。その1人であるマルクスは、3学年にわたって全5分冊中3分冊に登場する。残り5名は、クラシック音楽の作曲家が2名、アメリカ大陸の歴史と係わりの深い人物が2名、そして、第2次世界大戦の戦争犯罪者ヒトラーである。現代の大衆文化の有名人は見あたらない。

[その他の人名] 中国系の人名がほぼ全単元にわたって多数登場する。名前の提示方法は、中国風に姓、名の順序か姓のみである。中国系以外は、半数以上が国籍不明である。この場合、英語圏あるいは西欧の人名である。

中国系以外で国籍が明らかな人名は、大方が英語圏の名前である(表2)。イギリス人とアメリカ人が多数を占め、この両者とオーストラリア人が全分冊に登場する。カナダ人とニュージーランド人は2年次だけに登場する。一方、ヨーロッパの場合には、そのほとんどが小説などのリーディング教材に登場している。その他の地域では、中東のエジプト人4名が1分冊の1課に登場しているに過ぎない。この両地域の名前は、いずれも、単元の本文中だけに限定される。

表2 その他の人名：地域別国別数と登場単元数

		1 A	1 B	2 A	2 B	3 A
ENG	Eng	5 (3)	7 (4)	4 (1 + 2E + 1C)	9 (4 + 1G)	2 (2)
	US	7 (4)	1 (1)	5 (2 + 1E)	5 (1 + 1E + 1C)	3 (3)
	Austl	2 (4)	4 (2 + 1E)	1 (1)	1 (1E)	4 (1)
	Ca	—	—	1 (1)	2 (1E)	—
	NZ	—	—	2 (1G)	—	—
EUR	Fr	—	3 (1)	—	2 (1)	—
	Gk	—	1 (1)	—	—	—
	It	—	—	—	—	5 (1)
ME	Eg	—	4 (1)	—	—	—

〈注〉数値は名前の数、()内は登場単元数、網掛けの数値は小説等のReading教材に登場
E: Exercise だけに登場, C: Close Test だけに登場, G: 巻末の文法のまとめだけに登場

[地域・国] ここでは、中国以外の国々の扱いについて述べる。なお、中国は、全分冊のほとんどの単元に登場している。

地域別では、英語圏がどの分冊中にも最も頻繁に登場する(表3)。また、2年次の1分冊を除き、すべての単元に登場している。英語圏に次いで多いのは、ヨーロッパとアジアである。両者を比較すると、国の数は、ヨーロッパが全分冊でアジアのおよそ2倍である。しか

表3 中国高校英語教科書：地域別・国別地名登場頻度

		1A	1B	2A	2B	3A
Eng	US	12(4)	7(2) , 3A, 2G	10(2) , 1G	9(1) , 1C, 1S	11(3) , 2C
	UK	9(2) , 2N	11(2) , 1A, 1G	8 , 1G	8 , 3C, 1N, 1G	8 , 1C
	Austl	9(4)	5(1) , 1A	5(3)	3(1)	5(2)
	Ca	4(1)	5(3)	3(1)	2(1)	1 , 1C
	Ir	-	2	-	-	-
	NZ	-	-	- , 1G	-	2
	Total	14(3)	12 , 5A, 3G	11(1) , 3C, 3G	12 , 3C, 1G, 1S	12(3) , 2C
国の数	4	5	5	4	5	
Eur	Europe*	3(1)	5(1)	3(2)	5(1)	5 , 2C
	Fr	2(1)	5(2) , 2A	3(1) , 2C	4(1)	3
	Rus	1(1)	3	3(1)	1	2(1)
	Ger	-	2 , 1A	1	2	2 , 1C
	Gr	1	1	-	-	2
	Sw	-	- , 1A	1	1	-
	It	-	-	-	1(1)	2 , 1C
	Sp	1	1	-	-	- , 1C
	Belg	-	1	-	-	-
	Neth	-	-	- , 1C	-	1 , 1C
	Port	-	-	-	1(1)	-
	Pol	-	-	-	-	1
	Swe	-	-	-	-	1
	Total	5(1)	9(1) , 4A	6(2) , 3C	9(3)	10 , 3C
国の数	4	7	5	6	9	
As	Asia, Asian*	1(1)	2	3	3(3)	4(1) , 1C
	Jap	2(2)	7(5)	3(2)	2(1) , 1C	2 , 1C
	Ind	2(1)	- , 1A	2(1) , 1C	2	3 , 2C
	Kor, S Kor	-	1	-	1(1)	-
	Tai	-	2(2)	-	-	-
	Sing	-	-	1(1)	-	-
	Cam	-	-	-	-	1
	RI	-	-	-	-	1
	Total	4(3)	9(6) , 1A	6(2) , 1C	7(4) , 1C	8 , 2C
国の数	2	4	3	3	4	
Af	Africa*	-	4(1) , 1A	2(1)	3(1)	2
	Ken	-	-	-	-	1
	Total	-	4	2(1)	3(1)	3
国の数	-	-	-	-	1	
ME	Middle East*	-	2	-	1	1 , 1C
	Eg	-	1	-	1(1)	3
	Total	-	3	-	2(1)	3 , 1C
国の数	-	1	-	1	1	
SA	South America(n)*	3(3)	-	1	-	2(1)
	Br	-	1	-	-	-
	Per	-	-	1(1)	-	-
	Total	3(3)	1	2(1)	-	2(1)
国の数	-	1	1	-	-	
CA	Caribbean*	-	-	-	1 , 1S	-
	PR	-	-	1	-	-
	Mex	-	-	-	- , 1S	-
	WI	-	-	-	1(1)	-
	Total	-	-	1	2(1) , 1S	-
国の数	-	-	1	2	-	

数値：登場単元数(Exerciseだけに登場する単元数)、Exercisesは各単元の各課に対応している

N：各単元の各課の注で、数値は注だけに登場する単元数

A, C, S, Gの数値は登場回数

A: Additional exercises, C: 各単元に付したClose test, S: 巻末付録のSong, G: 巻末の文法のまとめ

*印：複数の国にわたる地域名

し、単元数は、5分冊中3分冊で上回っているが、2年次の分冊ではアジアと同数である。ただし、アジアの場合には、練習問題だけに登場する割合が大きい。その他の地域では、全5分冊中、アフリカが4分冊、中東が3分冊、南米が3分冊、中米が2分冊に登場する。ただし、南米と中米は、そのほとんどが練習問題だけに登場し、中米は、さらに、2年次だけに限定される。

国別では、全分冊に登場するのは、英語圏：アメリカ・イギリス・オーストラリア・カナダ、ヨーロッパ：フランス・ロシア、アジア：日本・インドである。その中で、登場単元数が最も多いのは、1年次の1分冊でイギリス、残り4分冊ではアメリカである。英語圏では、オーストラリアがこの両国に次ぎ、アイルランドとニュージーランドはそれぞれ1～2分冊の2単元に登場する。また、ヨーロッパではフランスが最も多く、アジアでは日本がおしなべて最多登場国である。ただし、この両国は、単元とは別枠の練習問題や Close test に登場する割合が大きい。

アフリカ、中東、中米、南米は、登場する国数も単元数も非常に限られている。ほとんどの場合、1ヶ国、1単元である。ただし、3年次の分冊には、アフリカと中東の1ヶ国がそれぞれ3単元に登場している。

【国内の地名】 中国以外で全5分冊中2分冊以上に登場する地名を表4に示した。いずれも首府あるいは知名度の高い地名である。英語圏がその多数を占め、中でもアメリカの地名が多い。欧米以外では、東京だけが複数の分冊に登場している。

1分冊だけに登場する地名は、ほとんどが小説などの Reading 教材もしくはコンテキストのある対話文に登場している。

表4 2分冊以上に登場する国内の地名

イギリス	ロンドン(5) スコットランド(3)
アメリカ	ニューヨーク(4), サン・フランシスコ(4), ロス・アンゼルス(3), フロリダ(3), ワシントン DC(3), アラスカ(2), ケンタッキー(2), カリフォルニア(2)
オーストラリア	シドニー(4)
カナダ	オタワ(2)
フランス	パリ(2)
イタリア	ローマ(2)
日本	東京(4)

〈注〉() 内の数値は登場分冊数、網掛けは3学年にわたって登場

【言語名】 英語と中国語以外では、フランス語とドイツ語が全分冊に登場する。その他には、単元の本文中に、スペイン語(1A)、ロシア語(1B)、ウェールズ語(1B)、ギリシャ語(3A)が登場している。ロシア語は、別の2分冊(1A, 2A)の練習問題にも登場している。

本文外では、日本語が3分冊(1A, 1B, 2A)の練習問題と注に登場する。また、2Aの練習問題には、シンガポールの公用語として、マレー語とタミル語が登場している。

[外国の風習・祭礼行事名] 単元の本文中には登場しない。その他の箇所に登場する行事名も非常に限られている。文章中では、New Year's Eve, New Year, Christmas がスコットランドの大晦日の話(1B)に、そして、Christmas が『賢者の贈り物』(2B)に登場し、単文中には、April Fool's Day(1A), Christmas Eve(1B), Mother's Day(3A)が登場しているに過ぎない。欧米圏以外の行事名は取り上げていない。

(2) 話題

[特定の1ヶ国の文化] 1単元中で、地理、気候、歴史など、文化を包括的に扱っているのは英語圏の国々である。この方法で、1年次ではアメリカ(A), イギリス(B), アイルランド(B), 2年次ではカナダ(A), 3年次ではオーストラリア(A)を取り上げている。

話題を限定した取り扱いは、アメリカとイギリスが多数を占める。その話題は、科学、マスコミ、ビジネス、旅行、自然災害、ファストフード、夏休み、音楽、コインや切手収集、レストランで誰がお金を払うか、など多様である。ただし、「学校の実験室の使い方」や「医学関係の国際学会が開催された際の人違いの話」のように、必ずしも特定の国が舞台である必然性がない内容の場合に、イギリスを舞台とする傾向にある。英語圏では、その他に、オーストラリアが車の購入の話題の舞台になっている。また、登場人物の名前から舞台が英語圏だと判別可能な話題も多い。

英語圏以外は、いずれも地球社会的視点から問題視される話題である(表5)。カンボジアの場合には遺跡修復との関連でその歴史にも言及しているが、その他は、環境問題、人種問題、テクノロジーの進歩に伴う問題について、各国の状況を具体的に述べた内容である。

[複数国・地域の文化] 大方は、文化比較、文化史、もしくは、地球社会的視点の話題である。取り上げ方は、中国とアメリカ、あるいは、中国と欧米圏が中心である(表6)。また、その他の地域は、特定の国に言及せず、一括して地域名で取り扱う傾向にある。

文化比較では、7種類中3種類が、英語圏と中国、あるいは、西欧と中国だけを取り上げている。また、文化史は、ヨーロッパ人がアメリカの地で見いだした食文化の伝播史と中国の紙の歴史である。後者は、製紙技術が中東からヨーロッパへ伝えられた時期とアメリカで製紙が開始された時期にも言及している。

地球社会的視点の話題である平和・戦争問題に関しては、第一次世界大戦、第2次世界大戦、冷戦という用語が、単元中あるいは練習問題の単文中に登場している。しかし、直接の話題として取り上げてはいない。

[人物(伝記)] 偉人・有名人の調査結果と同様の傾向にある(表7)。アメリカ人が最も多数であり、その領域も多様である。また、残り7名中5名は科学者である。この5名中3名に

中国高校英語教科書の文化の取り扱い

表 5 英語圏以外の 1ヶ国が話題

インド	森林保護
カンボジア	遺跡修復
エジプト	ダム建設に伴う遺跡保護
ブラジル	ビル火災
南アフリカ	アパルトヘイト

表 6 人物の話題 (伝記)

アメリカ	Disney, M.L. King, Jr., Lincoln, Lindbergh, Presley, Wilma Rudolph, Edgar Snow
イギリス	Chaplin, Newton, Stephenson
ドイツ	Einstein, Marx
フランス	Curie
中国	Jia Sixie

表 7 複数国・地域の文化が話題

	ESC	Eur	Asia	その他
1. 文化比較				
性別による職種	Eng, Austl		Chin	
健康な食事		Western	Chin	
禁煙	Eng		Chin	
食べ物	US, Eng	Ger, Eur	Chin, Ind, Jap, Asia	ME, North Pole, desert,
スポーツ			Chin	Arab (Eg, Ind 列挙の 1つ)
ボディ・ランゲージ	US, Eng	Fr, Rus	Chin, Asia	PR, Arab
音楽	US		Chin, Ind	Africa, Caribbean
2. 文化史				
食文化の伝播	Eng	Eur	Chin	
chocolate の伝播*	American Indian	Sp, Neth, Eur	Ind	
記録紙***	US, Eng	Rus, Sp, Eur	Chin, Kor, Asia	ME
3. 地球社会的視点				
食糧問題	US	Western EU, Eur, Neth	Chin, Ind	Eg, ME, less-developed
汚染・環境問題	Austl, Eng, US	West Ger, Gr, Rus, Eur, Medit	Chin, Ind, Jap	Af, developed
チャリティー*	Eng, Ir			Af
スポーツ**	Eng	Gr, Ger, Swe	Chin	Ken
人工衛星*	US, Eng			
障害者*	Eng (Hawking)	Ger (Beethoven)		

* 中国は含まれていない

** オリンピック, 国際競技大会

*** リスニング問題の解答記入表だけから推測不能な国名は含まない

関しても、活躍・研究の場あるいは亡命先としてアメリカに言及している。

[ストーリー] 内容は多様である。産業スパイの話，フランス革命を背景とした恋愛物語，クリスマス・イブの夫婦愛情物語，女の子を助けたというバスの特別客が実は犬であったというヒューマン且つユーモラスな話，麻薬患者の娘を病院に見舞った母親の心情の描写などを載せている。

ストーリーの舞台は，エジプトが舞台の1つを除き，すべて，英語圏もしくはヨーロッパである。ただし，アルフォンソ・ドーディ作『最後の授業』を含むフランスが舞台の2編を除けば，舞台が英語圏であるかどうかに関わらず，登場人物名は英語圏の名前であるか，もしくは，その作者がイギリス人である。たとえば，エジプトが舞台のストーリーには，英語圏の人名だけが登場する。また，イタリアが舞台のストーリーはシェイクスピア作『ベニスの商人』，イギリスとフランスが舞台のストーリーはディケンズ作『二都物語』である。イギリスものでは，その他に，シャーロック・ホームズの探偵シリーズの一編，アメリカものではマーク・トウェインの短編 *The £ 1,000,000 Bank-Note* やオー・ヘンリー作『賢者の贈り物』などを取り上げている。

[言語] 英語の種類に関して，アメリカ英語とイギリス英語，カナダ英語とアメリカ英語の相違を取り上げている。オーストラリアとアイルランドが話題の単元は，その英語には言及していない。英語については，また，ことわざ，ジョーク，ユーモア，さらに，英語学習でBBC放送の番組や英字新聞の活用を意図した話題を取り上げている。

英語以外では，カナダが話題の単元で，公用語が英語とフランス語の2言語であることに言及している。これに関連して，練習問題の単文で，シンガポールの4つの公用語が英語，中国語，マレー語，タミル語であることに言及している。また，別の単元では，対話文の練習で，8ヶ国の名前とその使用言語を使わせている。その1ヶ国はカナダであり，ここでも公用語である2言語を並記している。残り7ヶ国中3ヶ国は英語圏のアメリカ，イギリス，オーストラリア，4ヶ国がドイツ，フランス，日本，中国であり，それぞれの使用言語を記している。また，マルクスの伝記では，外国語学習の重要性が話題である。マルクスの母語であるドイツ語に加え，外国語である英語，フランス語，ロシア語を習得した経緯を綴っている。

言語一般に対する認識を深めることを意図した話題は，2年次以降に取り上げている。2Bにアルフォンソ・ドーディ作『最後の授業』が，3Aに動物の言語の話題が登場している³。直接の話題ではないが，部分的に言及する単元もある。広告文の書き方の話題では，別の言語に訳す際の注意事項に触れ，言語そのものの相違だけでなく，言語文化の相違にも注意を促している。ボディ・ランゲージの文化比較においても，リスニングの箇所では，イントネーションが担う意味に焦点を当てている。

[その他] この話題は概ね次のような内容である。

- 1 身体の無事に係わる話題：家庭内外の事故，健康とスポーツ，応急手当，火事
- 2 教育： 読書・教育の重要さ
- 3 科学： 飛行，電話，橋の構造と材質，テクノロジー社会の未来，
生き物（象，蟻）の生態，地球の構成，火山，海の成分・
生物，歩く魚，冬眠，数学の楽しさ，科学的思考（なぜ）
- 4 経済・ビジネス： 商品問い合わせ，広告文，新聞社
- 5 その他，家庭の話題： ペット，子供の時に夢見た職業，夫婦の話

話題によっては，国・地域名を例に挙げている。そのほとんどが英語圏もしくはヨーロッパの地名である。例外的に，日本が「テクノロジー社会の未来」に，そして，中東地域が「海水の成分・生物」に登場している。しかし，この場合にも，より多くの箇所では欧米圏に言及している。

4 総 括

[学習量] 年間学習量は，単純に教科書の頁数でとらえると，日本の2倍以上である(2(1)を参照)。取り扱う延べ話題数も同様である。

中国の場合は地域差があるが，Rossが資料として提示した重点校を一例とすると，日本と中国の高校英語の授業時数は次の通りである(238-40)。

	日本	中国
必修・選択	選択	必修
単位授業時間	50分	50分
年間授業週	35週	32週*
週あたりの授業回数	4回	5回

* 年間2期制，第3学年は28週

年間授業時数は，日本が140単位時間に対して，中国は1-2学年次：160単位時間，3学年次：140単位時間である。学習量の多さは，授業時間の差ばかりとは言えない。

この学習量の多さは，一つには，読書量の多い構成が意図された結果である。1988年に発表された「義務教育大綱」は，日本の学習指導要領に相当する。その大綱は，高級中学の英語教育の目的を次のように記している。

学生の基礎的知識を拡大し、4技能を発展させること、口頭と文字の両面において伝達能力を養うこと、特に読解能力の養成を重視し、併せて、英語の基礎を固めるために学習と運用が継続できるよう一定の自学能力を獲得させることである。また、しっかりとしたもの考え方と品格、愛国心と社会主義思想を身につけさせ、言語と国家についての理解を深めさせること、さらに、知力を発達させ、観察、注意、記憶、想像、連想などの諸能力を高めることである。

(沖原 9：下線は沖原氏の加筆、波線は筆者の加筆)

確かに、中国の場合には、リーディング教材を、各単元のリーディングの課に限らず、単元内外の練習問題の随所に挿入している。

しかし、コミュニケーション能力が軽視されているわけではない。前述の大綱は、目的の一つとして、口頭と文字の両面の伝達能力を養うことを記している。1993年のカリキュラム改訂ではその重要性をさらに強調し、教科書もこれを反映した構成になっている(Adamson & Morris 21-4)。各単元の4課中1課を対話に割り、応用練習の箇所を設けている。また、単元の話題に関連して、必ず「中国の場合どうか」といった設定で口頭発表や作文をさせる箇所も設けている。日本に比べ、より発信型のコミュニケーションを意識した構成である。

ただし、従来の訳読中心の教育方法が即座に全面的に取り替えられたわけではない。授業は、依然として教師中心であり、暗記、読解、文法中心である状況が指摘されている(沖原10)。

一方、授業中に学習者が要求された言語活動を見事に行う様子や重点校の生徒がこなす宿題量の多さが報告されている(沖原10: Ross 176-78)。報告者も指摘しているように、この状況が中国全般の状況であると即座に一般化しては言えない。学習意欲、参観用の授業、エリート校といった要素も考慮する必要がある。しかし、大綱の目標の一つは「自学能力を獲得させること」(前出引用の波線部)である。学習量の多さは、伝統的に、当然と考えられる授業外の自学・自習量の相違にもあるのではないだろうか。

高級中学は日本の高校より選抜性が高い状況も考慮すべきであろう。ユネスコ文化統計年鑑によれば、中等教育在学率は日本：96%('94)、中国：69%('96)、高等教育在学率は日本：40.3%('94)、中国：5.7%('96)である。これらの数値から、中等教育の後半を占める高級中学の就学率は、日本の高校の就学率をかなり下回るものと考えられる。学習者層の相違も学習量の多さの1因であろう。

[文化内容] 固有名詞と話題の調査結果では、多様性と登場頻度の点で、明らかにアメリカ志向である。また、英語圏の国々をかなり意識した取り扱いをしている。単元の話題として、アメリカ、イギリス、アイルランド、カナダ、オーストラリアを取り上げ、直接の話題ではないが、ニュージーランドも登場させている。

取り上げる英語の種類は、イギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語に限定される。各英語の特徴は、アメリカ英語とイギリス英語、カナダ英語とアメリカ英語を比較して説明している。カナダ英語との比較に、イギリス英語ではなくアメリカ英語を用いたのは、北米の隣接国で使用されているためであろう。あるいは、アメリカ、もしくは、北米大陸への関心の強さの現れであろうか。西欧系以外では、練習問題の単文でシンガポールの公用語が英語を含む4言語であることに言及しているに過ぎない。

英語圏以外の取り扱いは、ヨーロッパも含め、極めて限定される。また、偉人、有名人の取り上げ方は、科学領域を重視する傾向が顕著である。ヨーロッパでは、総数13名中6名が科学者であり、フランスの4名全員が科学者である。フランスへの関心は、文学や芸術ではなく、もっぱら科学に向けられている。また、中国の場合も、農学者の功績を単元の話題にしている。

このような科学重視の傾向は、国策と一致する。中国は、1970年代後半に「4つの現代化」路線を敷き、農業、工業、国防、科学技術の4つの領域の発展を意図している。実際、教科書が科学や工業を話題に取り上げる割合は大きい。自然を取り上げる場合も、感情的ではなく、自然科学の視点からとらえる傾向が顕著である。また、科学的思考や論理性そのものも話題として取り上げている。

先に述べたアメリカ志向も、また、この国策と一致する。アメリカは、中国が現代化を意図する4つの領域で、世界的に注目を集めている国である。アメリカが大きな関心の的であっても不思議はない。ユネスコの統計によると、50ヶ国への中国人留学生総数115,871人中、アメリカ：72,315人(1995/96)、イギリス：23,291人(1993/94)である。この両国に次いで多いのが、同じく英語圏のカナダ：3,241人(1993/94)、オーストラリア：2,657人(1993)である。

また、英語圏以外の地域は、主に、環境問題、人種問題など、人類に普遍的な話題に登場する傾向は日本と同様である。ただし、ヨーロッパ以外の国を取り上げる割合は、日本の場合より、さらに限定される。また、話題に関しては、日本の教科書が必ずと言っていいほど取り上げる平和・戦争問題が、直接の話題にはなっていない。ヨーロッパの偉人・有名人で登場しているのは、科学者の他に、中国の政治思想あるいはアメリカ大陸の歴史と係わりの深い人物4名と作曲家2名、そして、ヒトラーである。その作曲家の1人であるベートーベンの場合、話題の焦点は、障害にも拘わらず偉大な作品を創作し続けたことにある。また、日本の数多くの教科書にも登場するヒトラーは、アインシュタインの出生からアメリカ亡命まで、その科学者としての特性と業績を綴った伝記に登場している。日本のように、平和・戦争問題そのものが主要テーマの話に登場しているわけではない。

[教科書の英語] 教科書はロングマンとの共編である。したがって、全般的にイギリス英語を使用している。ただし、僅かではあるが、綴りや語いにイギリス英語とアメリカ英語の

混用が見られる。

イギリス英語以外の英語を使用するとすれば、イギリス以外の文学作品を登用する場合であろう。しかし、アメリカのマーク・トウェイン作 *The £ 1,000,000 Bank-Note* では、主人公はアメリカ人で舞台はイギリスである。イギリスの巨額な銀行券を巡って展開するこのストーリーでは、大方はイギリス英語の *note* を用いているが、一カ所だけアメリカ英語の *bill* を用いている。原文の書き直しであるため、両者の語いの使い分けを対照させると、必ずしも一致しない。原文でイギリス人の店員が使用する *note* が教科書では *bill* に変わっている箇所もある。

また、イギリス英語でアメリカ文化を語っても不自然はない。しかし、その英語の用い方はやや一貫性に欠ける。たとえば、アメリカのカントリー・ミュージックの話では *theatre* を、ファストフードの話では *favorite* を、また、アメリカのレストランでの支払いの話では *bill* を用いている。

このようなイギリス英語とアメリカ英語の混用は、編者の単純なミスともとれる。あるいは、アメリカ英語の影響が現れ始めているのかもしれない。

英語は、移民や植民地支配によって、イギリスから各地に波及していった歴史をもつ。その歴史的経緯から、アジアでは全体的に、今なお、イギリス英語の影響が根強い。中国の英語教科書もイギリス英語を基調とする。しかし、扱う内容は、日本と同様に、英語圏中心でアメリカ志向の傾向が強い。世界的視点の問題に注意を促している点でも同様である。ただし、英語圏以外の地域の取り上げ方や取り上げる割合は異なる。

これらすべてが、それぞれの国の政策を反映した結果ではない。標榜する政策の要は、中国が「現代化」、そして、日本は「国際理解」である。相違する政策の下で、同様の傾向が現れているのは、理念ばかりではなく、国の歴史的経緯や現実の社会情勢が英語学習にも影響を及ぼしているからである。

言語、民族、文化、国家は、それぞれに単純には等式では結べない関係にある。国単位で文化をとらえることにも、特定の国で使用される言語を民族語と呼ぶことにも問題がある。しかし、その問題は、一つには用語の定義の曖昧さに因る。また、各国に特有な文化と言語使用があることも否めまい。その意味で、中国の教科書の使用英語と取り扱う文化内容のズレは、英語学習の目的が、道具としての英語使用、つまり、世界共通語／補助語としての英語使用にかなり比重を置いていることを示していると言えよう。

〈注〉

- 1 中国の初級中学と高級中学が日本の中学と高校に相当する。
- 2 分類基準は、基本的に、日本の教科書を対象に行った調査と同様である（林田 102-3 を参照）。

中国高校英語教科書の文化の取り扱い

- 3 『最後の授業』は、日本では、その舞台であるアルザス地方の複雑な言語事情の歴史のために、教科書から姿を消した作品である。この作品の伝統的な解釈は、愛国心を基調とする「母国語もしくは国語を失う悲しみ」にある。しかし、80年代に、国家語と民族語という観点から別の解釈が提示された。フランス語使用禁止を悲しむアメル先生は、アルザス語を民族語とするアルザス人にとってはフランス語を強要したフランス国家の回し者であるという解釈である。さらに、アメル先生自身がアルザス人であるとするれば、国家によって民族語を奪われた人々の複雑な姿が浮かび上がってくるという解釈もある（詳しくは、中村 116-32を参照）。

引用・参考文献

- 沖原勝昭 「中国の外国語教育事情」『英語教育』11月号 東京：大修館書店，1997.
- 中村敬 『外国語教育とイデオロギー』東京：近代文芸社，1993.
- 林田享子 「固有名詞の取り扱いにみる国際理解」『岐阜聖徳学園大学紀要』第36巻，1998.
- ユネスコ統計年鑑1997 東京：原書房，1998.
- Adamson, Bob & Paul Morris. "Focus on Curriculum Change in China and Hong Kong—The English Curriculum in the People's Republic of China," *Comparative Education Review*, vol. 41, no. 1. 1997.
- Ross, Heidi A. *China Learns English*. New Haven and London: Yale University Press, 1993.